

4. 本郷地区における地域活動による地域の「つながり」と親しみと信頼関係の創出

本郷地区地域づくりインターン第3期・本郷地区担当 槇石 和直

第1章 はじめに

1-1 研究の背景

現在、全国的な「超少子高齢型人口減少社会」を迎えている。これは本郷地区においても例外ではなく、特に地区人口の高齢化率の情報は深刻な問題である。これは、平成29年度に公開されている本郷地区の高齢化率の集計データからも明らかである。本郷地区の人口は14,229人という松本市35地区中、市内6位という人口数にあるが、その中で65歳以上の人口は4,071人と市内3位の高さである。さらに、その内75歳以上の高齢化率は2,277人となっており、こちらは松本市内1位という数値である。このようなことから本郷地区において高齢化は深刻な地域課題であり本郷地区においても「超少子高齢型人口減少社会」の影響を強く受けているといえる。そして、そんな本郷地区では現在3つの大きな取り組みが動き始めている。

1)

平成29年度から松本市地域づくりインターンとして本郷地区を担当する私は、「地域の居場所」とは何かという観点から本郷地区の地域づくりについて理解を深めることとした。そこでポイントとなったのは松本市独自の事業であり、本郷地区にある2ヶ所の「福祉ひろば」と徐々に地域内で立ち上がっている「地域サロン」という2つの「地域の居場所」であった。どちらの「居場所」も共通して果たされる効果として上げられるものは住民のための「たまり場」であるということだった。

この「たまり場」機能は現在進行形で本郷地区の2ヶ所の福祉ひろばで果たされている機能である。しかし、大きな課題として本郷地区の立地上の関係があった。本郷地区の面積は83%を山地が占めている。更に地区全体の面積も広く38.28km²にもなる。場所にもよるが、勾配の急な坂道なども障害となり、車を持たない高齢者にとってとは身体へ与える影響も少なくない。この立地的な事

情から福祉ひろばにも通えない住民が現れていることも事実であった。

一方で、昨年から本年度にかけて盛んに立ち上がる「地域サロン」は、基本的に利用者が徒歩圏内で通える町会公民館などでの開催が多いこともポイントであった。物理的な問題を解消することに成功している町会ごとのサロンが多く、町会単位で開かれる「気軽に集える地域の縁側」として住民に親しまれ始めている。

2)

本郷地区では住民に親しまれるサロンづくりが行われている一方、本郷地区の中心街である浅間温泉では近年の客足の減少をどうにかすべく地元住民を中心に浅間温泉活性化のための様々な動きが始まっている。

現在、特に活発な活動をしているのが「タビオコシ会」という団体だ。この「タビオコシ会」は、2012年に当時の八十二銀行浅間支店の支店長の呼びかけにより結成された。会の名称の由来はそれぞれ参加されている旅館の頭文字からとって名づけられた。すなわち、それぞれ玉の湯、琵琶の湯、おもと、小柳の4軒の旅館の集まりから「タビオコシ会」となった。

「タビオコシ会」、温泉街活性化のための取り組みを目的にミーティングなどを重ね活動が続けてきた。2016年秋からはより会の窓口を広げ、月1回での定例会を開催しながら浅間温泉を活性化するためには何ができるかを考えてきている。初期メンバーは5名だったが、現メンバーは自営業者や会社員、学生を含め会員数は40名にもなる。メンバーが徐々に増えている中、最近では「タビオコシ会」との接点から信州大学、武者忠彦准教授とそのゼミ生による合同のワークショップや、活動を行ってきている。

3)

最近では本郷地区歴史ある建物の利活用を考えるとという動きから、浅間温泉第5町会に建つ築100

年を超える^{しょうもんぶん こ}松門文庫の利活用を考える動きが始まっている。この活動は平成30年度の「松門文庫を考える会」が立ち上がりから本格化した。その後、何度か事務局内での打ち合わせが行われ、平成31年度の2月11日と3月10日には2回に分けての「松門文庫を語る集会」が開催される運びとなった。この集会には「松門文庫」に興味のある人、思い入れのある人達が集まり、ワークショップ形式で「松門文庫」の利活用方法について考えるもので、当日は参加者の仲でアイデアを出し合い、「松門文庫」について地域全体で考えていく動きが見え始めている。

1-2 研究の目的

居場所づくり、温泉街の活性化、松門文庫の利活用という異なる目的を持つ3つの活動であるが、「関係者」という点で、それぞれの取り組みが共通している部分がある。「地域サロン」、「タビオコシ会」、「松門文庫を考える会」はそれぞれに幾つかの関わりを持つ参加者が存在している。たとえば、「松門文庫」では、サロン運営に関わる地元の町会長や民生委員、「タビオコシ会」メンバーが「松門文庫を語る集会」に参加していた。一方で「タビオコシ会」では、「タビオコシ会」主催のイベントで一般の住民を含め、町会長や日ごろサロンに関わっているような人達もイベントに参加していた。

こうしたことから、同じ地区の中で起こっている地域活動はそれぞれの活動の間を行き来できる人物や、関係者によってそれぞれがつながりを持つことができている。そして、一見別々の動きに見える地域活動は、地域の中では相互に関連する一連の動きでもある。「本郷地区の住民」という意識を共有していることが持つことが解ってきた。

昨年度の研究において、私は本郷地区の地域を支える大きなポイントは、地域課題を発見し理解を深め、解決に向けて働きかける人を育てると言う「人づくり」とその人達が連携する「関係づくり」であると考えた。したがって、本研究におけるテーマは前回同様、本郷地区の地域づくりを考える「人づくり」と「関係づくり」であるが、昨年の研究結果を踏まえ、より視野を広げた取り組みを行い、本郷地区の地域への理解をより深めるものとした。

1-3 問題提起

地域性を理解するために、本年度着目したのは、地域の住民の日々の活動への考えや視点を知ることであると考えた。そして、その糸口になったのが、本郷地区内の活動で強い効果を成す住民同士のつながりであった。本郷地区全体で見られる活動の要所には、民生委員や、町会長など地域のキーパーソンとなる人の組織の両立が果たされている。これによる情報の共有が行われ繋がりが生まれていた。これは地域サロン単位でも考えることができた。

サロン活動にも各サロンの垣根を越えたつながりがある。サロンを運営しているボランティアが別のサロンにもスタッフとして参加しているケースがあり、これにより情報共有や、交流が行われている。これは強いつながりのある関係と言える。



上は「サロンふくろう」下は「にこここサロン」どちらも本郷地区内で開設されているサロンで、中には別のサロンとの掛け持ちをされているボランティアスタッフもいる。打ち合わせの機会には他のサロンでのアイデアも参考にされる。

しかし、逆に他のサロンの噂のみや、直接見学等に行ったことがなければ、それは弱いつながりだと考えられる。

サロンについては、それぞれの活動が結びつき本郷地区全体としてサロンをよりよいものにして



こちらは平成29年度に行なわれた浅間温泉第1町会のサロンの様子。
この日の催し物のひとつとして、参加者全員で手品を使った頭の体操を体験した。



「サロン・ボランティア交流会」の後、平成30年度には浅間温泉第2町会のサロンでは1町会と同じ人が招かれ、人形劇などを披露した。

いるが、本郷地区において取り組まれている分野や目的が異なる活動がお互いに連携しているかについては課題であり、今回のその現状と問題を明らかにした。

第2章 研究方法と研究内容

2-1 実践事例

私が本年度本郷地区で関わってきた事業は大きく分けて3つとなる。

- 1) 地域サロンへの関わり
- 2) ボランティア協議会「ささえあいの会」での講座の企画
- 3) 「タビオコシ会」への関わり
- 4) 「松門文庫を語る会」への関わり

まず、地域サロンへの関わりは、昨年度から続く活動であり、住民からの生の声や地域の雰囲気を感じることのできる機会である。こうした場所があることで参加者を含めた地域のボランティアスタッフにはどのような思いや効果があるか実際に足を運びながら考えることができた。

こうしたサロンへの関わりから本郷地区ボランティア協議会「ささえあいの会」の事務局として、本郷地区のボランティアに対し、よりニーズに副った企画を計画することができた。そのうちのひとつである「本郷地区 読みきかせ講座」は本郷図書館との連携も果たしながら本郷地区の住民に対して「読みきかせ」を学ぶ新たな機会を設けることができた。

また、平成30年度に新たに「タビオコシ会」へ参加したことは貴重な経験となった。「タビオコシ会」の浅間温泉の活性化に向けた取り組みからは学ぶことが多かった。温泉旅館経営者や商業者と共に活動を行うことで、観光や商業の観点からまちづくりを考える機会となった。以上のことを踏まえ、それぞれの事業の内容や考察などを述べていきたい。

2-2 本郷地区の地域サロン

1) サロンの立ち上がりの背景と新たなサロン

本郷地区では住民の「ささえあい」活動を活性化すべく、平成27・28年度に勉強会を実施し住民同士で地域づくりに対する関心を深めた。こうした勉強会を重ね地域の課題を整理した本郷地区の住民は、本郷地区の高齢者への見守りや居場所づ



上は洞町会のサロンの様子。4月に開催されたもので、お花見が企画されていた。

下は浅間温泉第4町会のサロンこちらは12月末の時のものでお正月に向けしめ飾りの製作が行われていた。

くりのための活動として地域サロン活動が盛んに行われていくようになった。元々定期的に行われていたサロン活動に加え、平成29年度には7ヶ所そして、平成30年度では5ヶ所の町会や団体を中心にサロンが立ち上がり、現在本郷地区では地域住民が中心となって様々な経緯で立ち上がったサロンは現在12ヶ所になった。

地域のサロン活動が日常生活に浸透し始めている本郷地区であるが、平成30年度から実施されている「本郷地区地域福祉計画・活動計画」(以下、福祉計画)においても重要な活動として位置づけられている。

あるボランティアは、「サロンの中身を考えることはとてもやりがいがある。参加者達も充実感を感じてくれているが、運営する自分たちも充実感や達成感を感じることができ生きがいになっている」と話してくれた。サロンに限らず、活動に対する充実感や達成感は参加者側、運営側にとって、やりがいを見出す動力源となる。そして、そこから生まれるサロン活動の活気が地域を元気付けている。こうした町会単位で紡がれる効果が住民同士での共通の実感となり、福祉計画においてもこのサロン活動の重要性が記されており、地域住民が積極的に取組むことのできる活動のひとつとなっている。

2) 絵本の読みきかせ講座の実施

本年度は、新たな企画として町会サロンの場で高齢者向けの絵本の読みきかせを行った。サロンの中で本の読みきかせを企画した経緯としては本郷図書館の職員から絵本の読みきかせをサロン活動等で高齢者向けに行ってみたいという提案があったのがきっかけとなった。この提案を本郷地区、原町会サロンの運営をされているボランティアに相談したところ、「面白そうだから是非やってみよう」という話に発展した。

この絵本の読みきかせを地域のサロンで実施することとなった狙いとして、もっとも大きかった目的が、「童心に返って楽しんでもらう」ということであった。これは、サロンに参加される高齢者が数十年ぶりに聞く読み聞かせを体験してもらうことで、その時間をより満喫してもらえるのではないかという試みだった。上記の写真の様子からもこの読みきかせの企画は当日絵本や、紙芝居の読みきかせなどを行い、多世代の交流も兼ねることができ、好評の中終了した。



写真は実際に読みきかせが行なわれたときのもの。当日は祝日を挟んだ連休だったこともあり、町会内の子ども達も含めた世代間の交流にもなった。

この読みきかせは、後日ボランティア協議会の定例会や口コミなどで噂が広がり、他の地域サロンでも開催されるようになった。こうして回数を重ねるなかで、地域のボランティアから「せっかくの機会だから読みきかせの技術も自分たちで身につけたい」という意見がでた。この住民からの声をきっかけに、ボランティア協議会ささえあいの会主催で絵本の読み聞かせについて学ぶことを目的とした講座、「本郷地区 読みきかせ講座」を開講した。

こちらは、全2回に分けた講座として12月8日と1月29日に行った。どちらの開催日も当日は講師を招き、読みきかせに適した絵本の選び方や、本の持ち人や読み方のコツなどを中心に学んだ。1回目は基礎的な部分をふまえ、ささえあいの会独自で開催だったが、2回目は中央図書館との合同で開催し、より実践的な技術の解説や聞き手の心をつかむ方などのレクチャーを受けた。



第1回目は絵本の持ち方、ページのめくり方などの基本となる部分からこういった絵本が読みきかせに向いているのかを話してもらった。

2-3 「タビオコシ会」

「タビオコシ会」主催で行われた枕投げ大会は、旅館と枕投げのイメージを組み合わせることで多くの人に浅間温泉がPRできるようなイベントを行う目的で開催された。平成30年度で第2回目となる本大会は9月9日に開催され、当日3種類の枕投げゲームが用意された。それぞれ「かるた枕」「バランスターゲット枕」「バトル枕」という名称で当日来場された参加者を楽しませた。一連のゲームを体験するには一人参加費500円が必要となる。一度参加費を払った後は一連のゲームを1回ずつ行うことができ、更に参加賞として浅間温泉中の飲食店や旅館の協力に集まった1日入浴権や商品券などが当たるくじ引きが引けるなど浅間温泉活性化のためのアイデアがちりばめられた。

チラシやポスター、「タビオコシ会」のSNS、ラジオ、新聞、テレビ等多くのメディアにも取り上げていただいた。当日は口コミによる来場者も

多く、一般の参加者の満足度は高かった。しかし、「枕ンピック」当日は前日の雨により急遽、屋外で行う予定だったバトル枕を室内へ設置しなおすなど、事態もあり、本来の目標集客数500名にはとどかず、来場者223名という結果になった。



かるた枕の様子



バランスターゲット枕の様子



大人から子どもまで幅広い世代が枕投げに熱中できるイベントとなっている。また、ゲーム終了後の抽選会では浅間温泉中の飲食店が特賞の提供や食事券を利用できるお店として協力してもらった。

一方で「枕ンピック」当日の抽選会は効果が現れており、温泉施設や飲食店の利用率が上がったという結果も出ている。また、こうした「枕ンピック」のようなイベントがきっかけとなり、「タビオコシ会」そのものの名前も広まりつつある。浅間温泉内でも「タビオコシ会」の名前を知る人達が徐々に増え始めている。現在は第3回「枕ンピック」も計画されている。

2-4 「松門文庫を考える会」

浅間温泉第5町会にある松門文庫^{しょうもんぶんこ}という建物がある。この「松門文庫」は大正6年に建てられた築100年を超える歴史ある建物である。「松門文庫」は、蚕種の生産で全国的に名をはせた浅間の「たまりや」の旧敷地^{くぼたくろお}に建つ、窪田畔夫(松門、天保9年－大正10年)にまつわる記念館であった。「たまりや」の詳しい歴史は定かではないが、戦前に相当な量の蚕種を生産していたことは判明している。製糸業を背景に近代化を強く推し進めた松本の歴史において、重要な役割を担っていたといえるだろう。往時の「たまりや」の様子は、写真長「信農写真画報」にも記録されており、大規模な蚕室が立ち並ぶ姿は蚕都として栄えた松本の歴史の一断片を伝えている。

「たまりや」の経営者であった二木洵は、和田村の名主を代々務めた窪田家の長男として生まれた。江戸末期には自身も名主を務めつつ、寺子屋を開き、教育にもあたった。筑摩県が発足すると、

学校世話役を務め、県学、郷校の設置を答申した。明治5年に中心地域で最初の新聞である信飛新聞を発刊したことも大きな功績である。明治12年に安曇軍長、明治21年に県会議員、明治25年に弁義士となるなど、近代化の牽引者であった。

また、「松門文庫」の「松門」とは窪田畔夫の雅号であった。芸術家(画人・漢詩人)でもあった松門は、古曳磐谷に南画を習い、京都で絵画を学んだという。晩年は、書籍や文墨に親しみながら生活をおくり、大正2年には信農芸術会の発足にあたって総裁に就任している。こうした松門の蓄積を地域に広く開き還元するためにつくられた記念館が「松門文庫」である。写真帳「信農写真画報」のたまりやの解説には「結構経営の大いなる己に驚く可きに氏(二木洵)は別に洋館一棟を附設し実父松門先生の所蔵を基礎として「松門文庫」を開き公衆の研學に資せり」と記させている。



「松門文庫」では何度か文庫内を見て回れる見学会が開催されている。こうした機会に松門文庫を知る方も少なくない。「松門文庫を語る集会」の第2回目においても見学が行なわれた。

こうした歴史のある建造物である「松門文庫」を現代でもう一度利活用できるようにしようという目的で組織されたのが「松門文庫を語る集会」である。この会には本郷地区の様々な団体が所属しており、一部例を挙げると、地域づくりセンター、公民館、町会連合会を始め、浅間温泉旅館組合や、観光協会なども所属団体として登録されている。こうした「松門文庫」の利活用をするための団体として準備を進めている。

平成30年度2月11日と3月10日に浅間温泉文化センターにて「松門文庫を語る集会」と題した意見交換会を2回に分けて行った。ワークショップ形式で行われたこの会の参加者は1回目60名、2回目30名の総勢約90名に達し、中には松本市外から足を運ばれた人もいた。「松門文庫」に関しては本郷地区の中でも既に知っている人と今回の語る集会まで存在すら知らなかった人達に分かれていた。こうした「差」を埋めるために本郷地区公民の橋本館長から「松門文庫」に関する歴史を始めとした概要を語っていただき、参加者全体で「松門文庫」に関する理解を深めた。この集会の目的は、歴史ある地域の建物である「松門文庫」をどのように利活用するかを考えることだ。「松門文庫」をどのように地元住民で残していけるかという点をポイントに話し合いが行われた。

1)「松門文庫を語る集会」後の地域での反応

この「松門文庫を語る会」の効果は、「松門文庫」のPRであった。「松門文庫を語る会」の中で、参加された住民はお互いに「松門文庫」に対する考えや意見をまとめ合い、またそれまで知らなかった人にとっては理解する機会となった。

これは、「松門文庫を語る集会」において「あんな建物があつたのか」や「どういった建物か知らず、ただの不気味な建物だと思っていた」といった感想を述べていた初めて「松門文庫」を人達が、集会の終わり際には「あんなに凄い建物だったとは思わなかった」、「良い勉強になった」といった言葉をのこされ会場を後にしていた様子からも伺える。

しかし、以下の「松門文庫を語る集会」の参加者内訳を見ると第1回目の参加者67名に比べ第2回目参加者はその役半数36名にまで落ち込みを見せてしまっている。本来であれば1回目と2回目両日参加を目的としていた語る集会であったが、両日参加をされた参加者の数字も多いとはいえなかつ

た。

しかし、こうした来場者の内訳から、今後必要とされることも見えてきている。まず、「松門文庫」に関わろうと考えている人達は様々な立場の人が多し。「松門文庫を考える会」の所属団体や関連組織は勿論、建築関係の人や、地元住民など自分たちの問題として捉え関わろうとしている人達もいる。こうした動きを丁寧に取り取り検討会が重ねられるようになることも必要に感じるところである。

2-5 活動を通して

全体の活動を通じ、本年度は地域サロン活動、タビオコシ会、松門文庫を考える会、それぞれのコミュニティの拡大が目に見えて感じられたと考えられる。例えば、サロン活動では読みきかせを通じ、新たなボランティア活動における広まりがあった。

「タビオコシ会」については、「枕ンピック」により、「タビオコシ会」そのものの知名度の広がりがあったように思える。地元のために活躍する有志の団体という存在が地域で広まれば認知度のみならず、今後のタビオコシ会主体での活動では地域のからの理解も得やすさやタビオコシ会を頼っての地域からの相談事の請負などにつながるのではないだろうか。

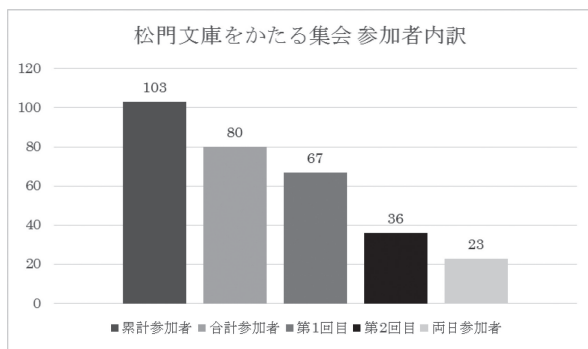
「松門文庫」は現在活動としてはまだ始まったばかりではあるが、この利活用に対する案件はもっとも本郷地区の住民が町会の垣根を越えて関わりやすい事例のひとつではないかとも考えられる。歴史的にも非常に価値の高いものであるため、地域住民が納得できる形で話が収束していけるような形になることがベストに思う。

第3章 全体のまとめ

居場所作りやイベントの企画など本郷地区で行われる様々な活動をつなげていくことが重要であると考えられる。こうした繋がりをつくるためには、組織や団体を行き来できる人物が重要になってくる。たとえば民生委員や町会長といった立場の人は、日ごろそのような活動や組織を行き来することのでき、情報を共有しやすい立場にあるといえる。

こうした民生委員や町会長のような地域全体の活動を把握できるキーパーソンとなる人物は、パイプ役として活動相互の関係性より確かなものに行うことができる存在である。

最終年度に向けて掲げるテーマとして本郷地区における「コミュニティシステム」について考えていきたい。このコミュニティシステムとは上記で触れたそれぞれの活動の関連性からくる町会や活動の分野を越えたネットワークであり、地域の様々な状況下で機能する地区の中に住民のネットワークを構築することは、新たな「コミュニティシステム」を創り出す可能性を持つ。本郷地区においては、そうした結びつきがサロン同士の関係や「松門文庫」の参加者の中から見え始めてきている。来年度はよりネットワークをより発展させ、よりよい安心して暮らせる地域とは何なのかについて理解を深めたい。



参考資料一覧

山崎亮／コミュニティデザイナー一人がつながる仕組みをつくる

出版 芸術学出版社 発売日 2011年4月22日

木村秀一／空き家を活かす空間資源大国ニッポンの知恵

出版 朝日新書 発売日 2018年11月13日

参考文献

本郷地区地域福祉計画・活動計画(H30～34) 具体的内容(取組み)

平成30年4月1日施行 本郷地区町会連合会